



Data 2023-36

監督・脚本: ロマン・ポランスキー
 原作: トマス・ハーディ『ダーバヴィル家のテス』
 出演: ナスターシャ・キンスキー/
 ピーター・ファース/リー・
 ローソン/ジョン・コリン/
 ローズマリー・マーティン/
 キャロリン・ピックルズ/リ
 チャード・ピアソン/デヴィ
 ッド・マーカム/パスカル・
 ド・ボワツソン

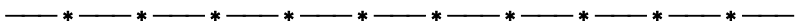
👁️👁️ みどころ

世界文学全集は多い。しかし、『テス』は『戦争と平和』ほど有名ではないから、あっと驚くラストの展開を知らない人も多いのでは？

時代は19世紀末、舞台はイギリスの小さな村。インチキ貴族のアレックのもとへ奉公に出た美しい村娘テスとの間の恋物語からは、“身分格差”が大きく浮上！

失意の中で出会った“第2の男”エンジェルは、“第1の男”とは正反対の進歩派で善良だが、結婚に向けてテスの暗い過去の告白は・・・？ナポレオンは英雄か否か？そんな世界観の中で、ナターシャと2人の男との恋物語が高らかにうたわれた『戦争と平和』に対して、『テス』にはかなりドロドロ感が！

テス役を“イングリッド・バーグマンの顔とブリジット・バルドーの体を持った80年代最も有望な新スター”たる、当時17歳のナスターシャ・キンスキーが演じたことが本作最大の話題。その美しさと悲しい恋の結末を45年前に戻り、172分の長尺でじっくりと！



■□■英国の文芸大作をポランスキー監督が英仏で共同制作！■□■

私は世界文学全集を小学生の時にほとんど読んだが、トルストイの『戦争と平和』に比べると、1891年に出版されたイギリスの文豪、トマス・ハーディの『テス (ダーバヴィル家のテス)』は、有名度でかなり劣るはず。したがって、そのストーリーを知っている日本人は少ないのでは・・・？それを、ポーランド人でフランス生まれのロマン・ポランスキー監督が、全編英語のセリフで、英仏共同制作で監督したのが本作だ。

ユダヤ教徒でポーランド人の父と、カトリック教徒でロシア生まれの母との間で1933年に生まれたポランスキーは、1960年代にフランスで成功を収めた後ハリウッドに

進出し、『ローズマリーの赤ちゃん』（68年）でハリウッドでも大成功した。しかし、1969年には愛妻で女優のシャロン・テートが殺害されたり、1977年には未成年の少女に性的暴行を加えたとして有罪判決を下される等の不幸を経てフランスに逃亡を余儀なくされた。その時期に、彼は以前にシャロンから映画化を薦められていたトマス・ハーディの『テス』を作ることを決意したらしい。そのため、本作には「シャロンに捧ぐ」との一文が。

2022年2月24日にはロシアによるウクライナ侵攻が起きたが、1939年9月1日に起きたのがナチスドイツによるポーランド侵攻。6歳の時にその危機に直面したポランスキー少年の体験が、彼の代表作である『戦場のピアニスト』（02年）を生んだわけだが、彼はなぜ1978年に本作を監督したの？

■□■誰がテスを演じるの？それはナスターシャ・キンスキー！■□■

ヒロインの名前をタイトルにした文芸大作を映画化するについて、最大の話題はヒロイン役を誰が演じるのかになる。ヒロイン役をタイトルにしていなくても、①『風と共に去りぬ』（39年）のヴィヴィアン・リー、②『誰がために鐘は鳴る』（43年）のイングリッド・バーグマン、③『戦争と平和』（56年）のオードリー・ヘップバーン等はとりわけ注目されるヒロイン役だが、ヒロインの名前をタイトルにした映画の代表は『クレオパトラ』（63年）のエリザベス・テイラーだ。

ポランスキー監督の妻であったシャロン・テートが『テス』の映画化を夫に薦めた際に考えられていたテス役は、当然女優でもあるシャロンだったが、シャロンの死亡後10年を経た1978年に本作のヒロインに抜擢されたのは、西ドイツ生まれの新進女優、ナスターシャ・キンスキーだ。本作の「プロダクションノート」によると、難航していたテス役に彼女を推薦したのはポランスキーだったそうだ。もっとも、当時の彼女は映画出演経験こそあれど、国際的にはまだ無名の存在だった。さらに当時のイギリス映画界はユニオン（組合）によって“機会の均等”に対し厳しく規制していた時代で、フランスとの共同製作を承認してもらうためには、政府の認可をもらうだけでは不十分で、組合の認可が必要だったらしい。そこで組合側は、主役がイギリス人にとって外国人である「ドイツ人の少女」＝「ナスターシャ・キンスキー」であることに抵抗を示したらしい。さらに、ドイツ語訛りの英語しか喋れない西ドイツ生まれのナスターシャは、全編英語の本作に臨むについて、イギリス英語をマスターするため、イギリスの田舎で実際に暮らし、仕事もしたらしい。

本作出演当時17歳だったナスターシャは、本作を特集した地元フランスの雑誌の表紙を飾り、その記事では「イングリッド・バーグマンの顔とブリジット・バルドーの体を持った80年代最も有望な新スター」と称されて熱狂的に迎えられたらしい。1979年といえば、1974年に弁護士登録した私が独立した年。そんな、人生で最も忙しい時期に公開された本作を私は見ていないから、そこまで言われると、今更ながら4K リマスター

版で復活した本作は必見！

■□■あの時代状況の下、テスを巡る2人の男のキャラに注目■□■

21世紀の今は、未だ実現にはほど遠いものの、人間は皆平等の時代、そして男女同権の時代だ。しかし、19世紀末の日本は土農工商という身分制度の中での武家支配の時代だったし、男女の格差は当たり前だった。それと同じように、世界に先立って近代化を進めた19世紀末のイギリスでも、なお貴族の権威が残っていたし、男女の格差は当たり前だった。

本作冒頭の舞台はイギリスのドーセット地方にある美しいマーロット村。その村で、ささやかな行商を営む酒飲みおやじのジョン・ダービフィールド（ジョン・コリン）が、偶然すれ違った村のトリングム牧師（リチャード・ピアソン）から「サー・ダービフィールド」と呼びかけられるところから、貴族にまつわる興味深い話が展開していく。同じく本作冒頭で注目すべきは、夕闇の濃くなり始めた草原で、村の娘たちがダンスを楽しむ風景。髪に花飾りをつけ、白いドレスをまとう大地の上を舞う乙女たちの中の、一際目立って美しい娘がジョンの長女のテス（ナスターシャ・キンスキー）。その娘たちの中に入って一緒に踊る、通りすがりの旅の若い男たちの一人が、後にテスの2番目の男として登場する、エンジェル（ピーター・ファース）だ。

そんな2つの導入部を終えた後、貴族のダーバヴィル家と親戚関係にあることが分かったジョンが、ダーバヴィル家と接点を持つべく、テスをダーバヴィル家に赴かせるところから、本作の本格的ストーリーが始まっていく。美しいテスを“従妹”と呼び、何かとモーションをかけてくるのが、テスの1番目の男となるダーバヴィル家の息子アレック（リー・ローソン）。彼は、ある日テスを馬に乗せることに成功。そして、人里離れた森の中にテスを連れ込み、強引にモノにしてしまうことにも成功！以降、アレックの“情婦”という立場になったテスは、さあ、それからどう生きていくの？

本作の主人公はもちろんテスだが、テスに絡まる2人の男が、アレックとエンジェルの2人だ。本作におけるテスのキャラは際立っているが、3時間に及ぶ本作のストーリーの準主人公となるこの2人の男のキャラにも注目！

■□■二重三重の悲運を克服！新たな恋から結婚へ進むの？■□■

アレックはホンモノの貴族ではなく、カネで買った貴族だが、それを自覚しているだけマン。“従妹”と呼んで目をつけたテスを腕づくで暴行したのはいだけないが、21世紀の今ではなく、19世紀末のイギリスともなれば、それも仕方なし？

そうかどうかは別として、そこでテスがアレックの“情婦”に甘んじることなく、実家に戻る決心をしたのは偉い。これも21世紀の自立した女性なら別だが、19世紀末のイギリスの若い女性ではまず考えられないことだ。さらに、神様は残酷なことに、実家に戻ったテスに対して“妊娠”という運命を突きつけたうえ、生まれてきた赤子もわずか数週間で病死してしまうという過酷な運命に。そんな恥辱と絶望の果てに、テスは故郷から遠

く離れた酪農場で働き始めたが、そこで出会ったのが牧師の息子であるエンジェルだ。テスを見て激しい恋の炎を燃やしたエンジェルは、進歩的で因習にとらわれない心の優しい青年だったから、テスはエンジェルからの結婚申し込みを承諾したが、そこでテスにとって最大の難関は、自らの暗い過去を告白すべきか否かということだ。20世紀から21世紀を生き、今や74歳になった私には、「誰だって秘密の1つや2つはあるのだから、アレックとの暗い過去や子供を産んだことなどは黙って、エンジェルと結婚して幸せになればいい」と(ずるく)考えてしまうのだが、さてテスは？

■告白の手紙の開封は？新婚旅行での告白合戦の結末は？■

本作が3時間の長編になっているのは、テスを巡る2人の男との恋模様を展開が複雑かつ劇的なものになるためだ。テスとアレックとの関係は弱者 VS 強者だったが、テスとエンジェルとの関係はまさに相思相愛。テスは自らの暗い過去を告白する手紙をエンジェルの部屋のドアの下に忍び込ませて彼の返事を待ったが、なぜか返事はなし。それを吉ととるか凶ととるか微妙だが、少なくとも怒っているのではないと判断したテスは、エンジェルとの結婚を承諾。ところが、何と結婚式の前日にテスはその手紙が床とカーペットの間に挟まれたまま読まれていないことを発見したから、アレレ。そうなれば、今更ながら直接告白するしかないが、ハネムーンを過ごすためにやってきた別荘で、まずはエンジェルから過去の女性関係を告白してくれたから、これは絶妙なシチュエーション。エンジェルのそんな過去を「すべて許す」と宣言したテスは、次は自分の過去を告白し、エンジェルの大きな心での“許し”を期待したが、さてその結末は？

■テスとエンジェルに意外な展開が次々と！■

私は、シャーシャーと正論を吐き、理想論を語る人間を基本的に信用しない。とりわけ、「僕は女性差別などしないよ」などと公言するような男は全然信用しない。したがって、本作のエンジェルを見ていると、18世紀末にこれほど進歩的かつ理想主義的な男がいることに驚いていたが、テスの“告白”を聞いて手のひらを返したように翻意したエンジェルを見ると、アレレ・・・？幸せいっぱいだったテスとエンジェルのハネムーンは、そこから一気に崩れてしまうので、それに注目！その結果、エンジェルはブラジルの農場で働くためイギリスを離れ、テスは酪農場時代の友人マリアン（キャロリン・ピックルズ）のもとに身を寄せて働くことに。

これにて、テスとエンジェルは二度と会うことはないのだろうか？そう思っていると、本作はラストに向けて、エンジェルがブラジルからイギリスに戻り、テスを探すために故郷のマーロット村を訪れるストーリーが展開していくので、その行方に注目！エンジェルはあの時の自分の行動を反省し、テスに許しをこう気持ちになったのだろうか？

■アレシ、殺人事件まで！こんな結末をどう考える？■

トルストイの名作『戦争と平和』（1869年）は、貴族の令嬢ナターシャと、彼女を巡る2人の男、すなわち律儀な高級軍人のアンドレイ、最初は英雄ナポレオンに憧れていた

貴族の息子ピエールを巡る壮大な歴史を踏まえた恋物語。『テス』もそれと同じように、テスを巡る2人の男、すなわち、アレックとエンジェルとの恋物語だ。『戦争と平和』はアンドレイ亡き後、死の淵をくぐる中でナポレオンに幻滅し、ナターシャへの愛に目覚めたピエールと、いくつかの恋を経て、やっとピエールへの愛に気付いたナターシャが、愛を確認し合うという幸せな幕切れになっていた。しかし、『テス』は、激しい自責の念に駆られてテスを探すためにイギリスに戻ってきたエンジェルが、最悪な形でテスと再会するクライマックスに向かって進んでいくので、それに注目！

今テスが住んでいるのは、避暑地サンボーンの高級アパートだが、それは全面的にアレックの庇護下でのこと。豪華な部屋着を着たテスは家の中に入ってきたエンジェルを見て驚いたが、そこでテスから出た言葉が「トゥーレイト」、「来るのが遅すぎた。二度とここに来ないで」というものだ。『戦争と平和』では、婚約していたアンドレイとしばらく離れている間に、モスクワの遊び人軍人の誘惑に負けてしまった若き日のナターシャが、アンドレイに対して、「オール・イズ・オーバー」、「すべてが終わった」と叫ぶセリフが印象的だったが、「トゥーレイト」は、それと同じように印象的なセリフだ。何が「トゥーレイト」なのかは明白だが、エンジェルが去った後、一人泣き崩れるテスを見て、アレックは彼女に見捨てられたエンジェルを嘲笑したが、そこでテスがアレックに対してとった行動とは？

まさか、そこで殺人事件が発生するとは！しかして、本作ラストはエンジェルとテスの“愛の逃避行”となるわけだが、こんな悲しい結末をあなたはどうか考える？少なくとも、あまり後味の良いものでないことは確かだが・・・。

2023（令和5）年3月28日記